

白選五十首



池田はるみ

いけだ・はるみ 1948年、和歌山県生まれ、大阪で育つ。京都女子大学短期大学部卒。'87年「未来」入会、岡井隆に師事。現在、編集委員。NHK学園短歌専任講師。歌集のほか、エッセイ『お相撲さん』『今日から始める短歌入門』（共著）がある。ながらみ短歌賞、河野愛子賞など受賞。

エンジンのいかれたままをぶつとばす赤兄とボルシエのみ知る心

あ、あ、あ、こゑ。吾を深々と続べゆくは誰がこゑあれは春の夜のこゑ

うつそりと月出でにけり 今宵はも月はキリスト空に架かりぬ

なべて世の憂きが好きなの とり分けてをとこ心のにんびにん風

両頬にゑくぼの浮かぶ人ゆゑにあやふやに世を渡らうといふ

許しますなどといつてはやらせたる絶技巧めちやめちやに好き

そうれそれ 天の壺より放たるるわれの魂虫 ほら飛んでゆけ

はくちうにをとめのひめをあやめたるをんなどれいのまぼろし見しか

てをのべてをとめのせなをゆみなりに息たえたまふぼたんちるごと

凜々しくて貴花田あな切れ者の若花田そよ娶らずにるよ

「憎らしい顔だつたわね」 本当は き、北の湖の尻が憎らし

「奇譚集」

一九九一年、歌集『奇譚集』を刊行した。私生活をほとんど描かなかつたのに、批評会では「大阪」の匂いがあるとされた。大阪から東京に嫁いで二十年近くたつていた。

夫の両親も夫も、もちろん息子も東京の人である。東京の（私にとって新しい）価値観に追随しようと、大阪的なものを振り払ってきたつもりであった。大阪人である私は、私を見つめ直すきっかけになった。

生活を預かる主婦から見れば、東京と大阪の違いは決して小さいものではない。この頃は、吉本の芸能人たちがテレビで活躍するようになって、大阪弁に対する違和感は少なくなつたが、ひと昔前はそうではなかつた。大阪弁はやかましく、えげつないものとして印

「疵が国・大阪」

帰りたきいろこのみやの大阪やゆきかふものはみなゑらぐなり

あんだホホしようむないことしようかいな格子は春の銀色しづく

おほふねのたゆたふやうに小錦が敵をかかへていま運びをり

しつぽりと地雨に濡るるマンシヨンの お前さんたら笑壺に入りて

ふるさとの映るを見れば故郷はひつくり返つて：呆然とせり

富士が峰の絶えぬおもひぞ荒神の凄きサリンはいづこに在す

この春はにろりんといふものが棲み にろりんとふは二浪のむすこ

つゆの夜やきつねうどんのよろしきは相合傘のよろしさに似て

雲垂らす天竺川に遊べるはこれの地震にて未生のほたる

陽がこぼれ春団治ゆきこれの世にまた陽がこぼれやすしが逝けり

むかしるし犬のアチャコはむちやくちやでござりまするといへば走りき

戦争が押し殺したる笑ひあり こころつぶれし人は笑はず

死者達は扉に凭れて聞きてをり 夫婦善哉 雨夜を伝ふ

恐ろしき診断の後まづ食ふ この世は食むにこと始まれは

螢 よどうすればいい 病む汝を取り戻すべくわれは点らむ

感情がふはふはのまま地下鉄に乗り込みたれば吾は曼珠沙華

くるしめば夫を殺せといふこゑすわがうちよりのこゑに驚く

歳晩に辞儀深々といたしたり汝が失ひし臓を思ひて

兄弟は病み父さんはいよよ老い二上山は晴れていますぞ

マンシヨンはガーゼ巻かれて建ちをれば風にかすかな窓明りあり

「ガーゼ」

象されていた。ましてや、生活感覚となると、厚かましい、やぼったい、きんぴか、など、ろくでもないことを言つて笑われる。実生活では嫌われるのである。

実は、ろくでもないと言っているが、私は厚かましいのも、やぼったいのも、きんぴかなのも大好きなのである。「元気があつてええやないですか」と思うのである。東京で嫌われたり、笑われたりするものが、実は大好き……。育つた文化が違うのだから、寂しいけれど、違いを認めるよりほかなかつた。

こういう自分に正直であろうと努めたのが、次の歌集「姓が国・大阪」である。大阪は道頓堀のほとり、賑わい誇る千日前通りの帽子屋の娘であつた母の鎖魂のために書いた。母は脳出血のため全麻痺であつた。

第三歌集「ガーゼ」は、大阪は富田林市に移つて病院を開き、働いた父や長兄の最後を、近代日本の価値観の終焉と捉えて描いた。私の一族は、もはや大阪市中央区には一人もない。父母や長兄の時代と違つて、臭気ふんぷんたる大阪的なものは、私の記憶の中のものでしかない。

師の岡井隆が、「大阪は東京を通過するとおもしろい共通言語になる」と言つたのは本当だと思う。大阪は古里だが、懐かしい私の異郷となつた。東京に暮らせばよく見える。

夕暮れの皮膚科に鶴が舞ひ降りてピアスをしてといひにけるかも

うつしみの九十一歳。晩年は晩年だらけの晩年である

戦前の光芒としてありし日の雀の学校 たれも失ふ

父逝きてほうやれほうの我ながらなみだ流れて荒川に来つ

大阪のをんなはころとにぎやかで哀しきときもころると笑ふ

白菜に春菊が入り魚が入り大血縁となりゆける鍋

マンシヨンの深き愉悦よ 人の上ひとの下にも人が暮らしぬ

愛しきやし風鈴売りが通るとき江戸がわたつてゆくやうな音

わが父母はからつぽになり眠たくて眠たくてもう、骨壺の中

にんげんがごちやごちやに住み泣くことがをかしからざる時代が終る

「日イ暮れてええ女やな」あほらしやの鐘が鳴るがなフフ法隆寺」

もう少し踏み込んでいふ わたくしはあつあつのたこやきになりたい

小さなるかほが流行りて大きなるかほがをかしく…をかしいことか？

しぶとくてアナーキーなる母神がこらへてゐます山の大雪

日本に国鉄ありき 男らの暗さが燃えて雪中をゆく

もう誰も兄ちやんとゐることはなし温かさうな座布団がある

歳月はあなたを残してくれさうだ背中にもたれしづかに泣きぬ

死ぬ母に死んだらあかんと言はなんだ氷雨が降ればしんしん思ふ

義妹が安心のやうに逝つたこと積み木がそつと積めたやうだよ